

Title	寛政九巳年の和蘭風説書
Sub Title	
Author	幸田, 成友(Koda, Shigetomo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.3 (1937. 11) ,p.67(395)- 75(403)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19371100-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

寛政九巳年の和蘭風説書

幸 田 成 友

本書は寛政九巳年（一七九七年）長崎の和蘭商館長から幕府に差出した風説書の原本で、縦三三センチ、横一四六センチ五、料紙として奉書紙三枚餘を用ひ、繼目には紙背に通詞目付三島五郎助の黒印がある。

風説書はバタビヤから長崎に入港した蘭船が齎らす所の海外最新の情報で、商館長から長崎奉行に提出し、翻譯の上幕府に進達せられる。和蘭側ではこれを幕府に對する「御奉公筋」「御忠節」と心得て、重大なる任務の一とした。

畏友學習院教授板澤武雄氏は數年來風説書の蒐集及び研究に従事せられ、最近日本古文化研究所報告第三として「阿蘭陀風説書の研究」を發表せられた。その卷頭において風説書の起原、目的、數量、作製手續、信用程度その他につき、綿密周到な論述があるが、それによると、教授が數年間に蒐集せられた譯文の風説書は、寛文六年（一六六六年）から安政三年（一八五六年）まで二百數十通に上るといふ。その

中教授は今回延享二年（一七四五年）までの分を發表し、以後の分も追つて公刊せられる由であるから、寛政九巳年の分を取急ぎ發表する必要は毫も無いのである。然し教授の直話に、風説書の原物は一通たりとも未だ目撃したることなしとあるので、こゝにその形式を示す必要を感じた。本誌巻頭の寫真版は原本の首尾を示すに止まるを以て、左に全文を掲ぐ。また原本には所謂變體假名が數多使用してあるが、印刷の都合上等は止むを得ず通用の平假名に代へた。

譯文があれば、その原文のあるべきは當然だが、當時の館長日記にこれを發見せずと、教授は語られた。

風 説 書

一 當年來朝之阿蘭陀船壹艘、五月廿四日咬啮吧出船仕、海上無別條今日御當地着岸仕。外ニ類船無御座。

一 去々年御當地より歸帆仕。十一月十七日海上無滯咬啮吧着船仕。

一 ふらんす國臣下の者共徒黨仕、國王并王子を弑シ、國中及亂妨、阿蘭陀國其外近國よりも同所に押寄及合戦。去ル寅年申上。臣下逆徒の者共追討仕、王孫の内國主ニ立、舊臣の者守護仕、國中漸平和ニ相成。近國和睦仕。然處。國より大軍を發、阿蘭陀國に押寄及合戦。末、阿蘭陀所領商館の向。亂入仕、剩弁柄并こすとの兩商館横領仕。彌戰爭相募

罷在_レ。

一りゆす國の女帝逝去の末、とるこ國と及戰爭申_レ。デーネマルコ スエーデン ノラルドアメリ
カ此三國の外、歐羅巴諸州何れも及合戦_レ段、追_レ本國筋より申越_レ。尤前件申上_レ通、忍_レげれ
す國と阿蘭陀國戰爭ニ付ては、咬啗吧表_レ通船難相成、委敷儀何分難相分御座_レ。就夫印度并咬
啗吧邊甚及騒動、諸商館の向_レも及戰爭_レも有之、專防戰の手當仕_レ儀ニ御座_レ。前件申上_レ
通、既印度邊の商館所_レ忍_レげれす國に奪取_レ儀ニ御座_レ。右ニ付_レ本國并印度の諸商館共不穩_レ
ニ付_レは、咬啗吧表_レ荷物廻着不仕_レ儀は勿論、大船の分は何れも軍船ニ相備、敵船を相防_レた
め、所_レ出張仕候得_レは、去年の儀何分御當國に_レ出船の手當難相成、仕出_レシ不申儀ニ御座_レ。其末
今以戰爭彌増ニ罷在、殊大船の向_レは過半去年來の戰爭ニ付_レは破損仕、其上咬啗吧乗筋に數多
の兵船を伏_レ罷在_レ得_レは、容易ニ難乘渡、既當年の儀も咬啗吧仕出_レシ儀難相成程の儀ニ御座_レ
得共、打續兩年渡來不仕、殊更外國筋右體之風説不申上_レ儀、於頭役共も甚以恐多奉存_レ。依之色
と評儀仕_レ處、逆も是迄乘渡_レ通りの大船ニ_レは、例の乗筋乗出_レシ_レは、敵船襲_レ儀必定の儀ニ
多、無難ニ乘通り_レ儀相叶間舗奉存_レニ付、例の乗筋よりは東南の方ニ針路を求乘通り_レ様、頭
役共より申付_レ。猶又別_レ暗礁多場所ニ御座_レ得_レは、其邊案内の船方の者共新ニ抱入、有合の荷
物積込、咬啗吧出船仕、今日無滯着岸仕_レ儀ニ御座_レ。且又當年かひたん交代期年の事ニ御座_レ

得は、是非新かひたん渡來可仕筈ニ御座ハ處、前件申上ハ通所及大亂、殊敵船防のため、諸商館ハ罷越役掛りの者共數多死失仕、誠ニ不慮の患ニ依り、無是非新かひたん乘渡不申儀ニ御座ハ。一咬啣吧せねらる ありてんぎ退役仕ハニ付、瓜哇國奉行はんおゝふるすたらあとと申者、せねらる役本國より申越ハ。

一此節於洋中唐船見請不申ハ。其外相替ハ風説無御座ハ。

かむま
げいすべるとへんみ以花押

右の趣船頭阿蘭陀人申口、かひたん承申上候通和解仕、差上申ハ。以上。

通詞目付

通詞

巳六月廿八日

- 三嶋五郎助○
- 加福安次郎○
- 石橋助左衛門○
- 中山作三郎○
- 名村多吉郎○
- 今村金兵衛○
- 本木庄左衛門○
- 横山勝之亟○

本書の差出人がいすべると・へんみい（ガイスベルト・ヘンミー）Gisbert Hemmi は一七九二年から一七九八年まで長崎の和蘭商館長であつた。平假名の氏名の下の花押は G^t Hemmi であらう。日付には單に巳六月廿八日とあるが、彼が在職中巳年は寛政九年（一七九七年）だけであるから、本書は同年のものに相違ない。最後に見える通詞目付一人通詞七人の氏名と實印とは、翻譯に對する連帶責任の意味で、その中通詞目付は通詞仲間の監督たるに止まり、語學に關係なく、また通詞中には年番なるものあり、寛政九年の年番は石橋助左衛門名村多吉郎兩名なれば、翻譯は主として是等兩名の手に成つたのであらう。

風説書第一項には本年咬啗吧發の蘭船が無事長崎に入港したこと、第二項には去々年長崎發の船が咬啗吧に到着したことを報じてゐる。咬啗吧はカラパ Kalapa と讀み、バタバヤの古名なり。本年到着した船はエリザ號 Eliza といひ、實は蘭船にあらず、北亞米利加の船にて船長をスチュワード R. O. Steward といひ、バタバヤ總督府で傭入の上日本へ派遣したもの、また一昨年出帆したはデルフリウス號 d'Erffius にして、中間寛政八年（一七九六年）には一隻も到着しなかつたのである。

第三項には先づ佛國に大革命が起つたため、和蘭その外隣國より兵を佛國に加へた旨を述べ、右の趣は「去ル寅年申上ひ」とある。寅年は寛政六寅年で、同年の風説書には或は佛國大革命について一層詳細

な記載があるのではないかと思ひ、板澤教授の好意によつて寅七月五日附の風説書を見たが、全く期待外れで、一二字を除き、雙方全然同一文句であることを知つた。それから本文には佛國に反革命運動が起り、王孫を擁立して隣國と和したとあるが、これは事實に相違する。和蘭は佛軍の侵略を被り、ために總^{スタットハウダー}統キルレム五世は英國に逃亡し、その後に出來たバタビヤ共和國が佛國と和睦するや（一七九五年五月）、英吉利は直ちに和蘭と絶交し、艦隊を派して和蘭の沿岸を封鎖したのみならず、東西印度における和蘭殖民地を蠶食したのである。本文のまゝでは何故^{えげ}れ^す即ち英吉利が蘭領を侵略したか不明である。弁柄^{ベンガル}は Bengal、こす^{クスト}とは Kust 沿岸の義で、コロマンデル沿岸を指す。但し一七九五年において英人の手に渡つた蘭領は、以上兩地方に止まらず、セイロン島、マラバル沿岸、マラッカ、モラッカ諸島、テルナターテを除く、及び喜望岬を含み、殖民國として和蘭の勢力は急轉直下した。

第四項冒頭のり^ゆす國は露西亞國、女帝はカタリナ二世であらう。二世在位中兩度までとるこ（土耳其）と戦つたが、一七九六年同帝崩御の後、土耳其との戦争ありしことを聞かず。デーネマルクは丁抹、スエーデンは瑞典、ノバルドアメリカは北亞米利加合衆國で、以上三國の外歐洲諸國兵火を被らざるはなしと述べてゐる。

次に再び英吉利の宣戦による本國及び東印度地方の不穩、人員船舶の缺乏、航海の危険、商品不足の

狀況を説き、去年日本行の船を派遣する能はず、若し本年も同様ならば、兩年連續して不參となり、殊に海外の風聞を上申せざるは蘭人の面目を害ふ所多きを以て、強いて一小船に有合の商品を積み、且つ航海中敵船の襲撃を慮り、態と航路を變じ、辛うじて入港せりと述べてゐる。バタビヤから長崎に到る通例の航路は「阿蘭陀風説書の研究」に見えるが、今回はそれより東南の方、別して暗礁多き場所を乗通つたといふだけで、委しいことは分らぬ。

最後に新任館長を派遣し、ヘンミーと交代せしむべきであるが、兵亂による人員缺乏につき、その義に及び難しと斷はつてゐる。

第五項は東印度總督の交迭を報じてゐる。せねらるはグベルヌール・ゲネラール Gouverneur-Generaal 總督の意、あるてんぎはキルレム・アルノルド・アルチング Willem Arnold Alting で、同人は一七九七年二月十七日退職。後任者のはんお、ふるすたらあとはピーター・ゲルハルズ・ファン・オーフェルストラーテン Pieter Gerhardus van Overstraten で、同人の前官を瓜哇國奉行とせるは、彼がジャバ北東岸の長官兼理事 Gouverneur en directeur van Java's Noordoostkust であつたのを指すか。

再びこの風説書の署名者ガイスベルト・ヘンミーについていはんに、彼は一七九二年ペトルス・テオドロス・シャッセの後任として館長の職に就いてから、前後五回風説書を上つてゐる。寛政四子年七月八日、同五丑年七月五日、同六寅年七月五日、同七卯年六月六日、同九巳年六月廿八日で、本書は實に

その最後のものである。さうして彼は翌寛政十子年春江戸に參府した歸路、疾を得て四月廿四日遠州掛川の旅宿に歿し、翌日遺骸は同所天然寺に埋葬せられた。墓碑は蒲鋒形にて縦六尺、横三尺、厚さ中央にて五寸、兩端にて三寸、表面に蘭文を刻し、周圍に石の玉垣を繞らす。この寸法と碑面の蘭文とは自分所藏の寫本題名なしにあるものと、歴史地理第廿八卷第五號に掲載せられたものとの間に、若干の相違がある。通詞石橋助左衛門は碑文を和解して、「所埋於斯亡人者、其名曰ゲイスベルトヘンミイ、蓋日本通商之カビタン也、生於千七百四十七年六月十六日、死於千七百九十八年六月八日、其翌九日葬之矣」といつてゐる。

ヘンミイの死因は何か。彼は江戸出發後氣色勝れず、島田驛で滯留保養した位であるが、廿一日掛川驛に到着した所、翌朝より發熱甚だ募り、廿四日終に死亡したといふのが通説で、それなら病死に疑ひないが、その後三十年、有名なシーボルト事件當時の商館長メイランの記事によると、ヘンミイは何か薩摩侯と密約したことがあり、それが幕府に知れたのを覺り、自ら毒を仰いで死んだのだ。死去の前日書類を引裂く音が聞えた。二人の日本人の從僕中、一人は入牢の上死刑となり、一人は逃亡して薩摩に隠れたが、これも捕縛せられた。ヘンミイは日本に七萬乃至八萬グルデンの借金を残したが、かゝる大金を何に使用したが、祕密の目的を達成するためだと説明するより外は無いなど、色々疑惑の點を擧げてゐますが、自殺説を充分證明するには足らぬやうです。

この風聞書の原本が何所で発見せられたかを記して本篇を終らう。本塾法學部教授永澤邦男氏の母堂は正齋近藤守重の孫にあられる。従つて正齋の遺物は相應多量に同教授の嚴父平三郎氏の手に保存せられてゐたが、現在は東京帝國大學史料編纂掛に所藏せられてゐる。自分は本春史學會の大會で始めてこの始末を知り、今宮助教と同行して永澤邸を訪問し、その際本書を一見したのである。正齋の勤書によると、彼は寛政七年六月長崎奉行手附出役を命ぜられ、同九年四月迄彼の地に在勤したとある。同地在勤は右の如く四月までとしても、出發は或は若干月遅延し、その間に本書を得たのではないか。若しこの想像が當つたとすれば、風説書は少くとも二通を認め、一通を長崎奉行所に止め、一通を幕府に呈したことになる。

本書一覽の後、更に同家から示された扇面二枚を表装した幅物を見ると、下段の扇面の左部に *Langs Leven en Vrolyk zyn* (長壽享樂) と大書し、*He. Letdieg* といふ署名がある。これはヘンミーの江戸参府に同行した外科醫で、日本の書類にへるまゝにすれつて *Hernanus Letzke* とあるものに相違ない。上段の扇面は劉雲臺なるもの、書及び畫で、嘉慶元年蔭月正齋老先生索書於崎陽客舍云々の句がある。嘉慶元年は寛政八年に當る、れつてきの蘭文も同じ頃正齋の請に應じて認めたものであらう。

(昭和一二、一〇、一四)